

第一線のシミュレーションでつなぐ 環境エンジニア 谷口景一郎

朝倉幸子◎TH-1
illustration:Taco

■環境へと

1984年兵庫県赤穂市に生まれた谷口景一郎さん。東京大学大学院建築学専攻特任准教授を務める。親族の建築とのかかわりは、祖父が塗装業だったくらい…かと。父親は海外に転勤するサラリーマンだったから、赴任先で暮らしたこともある。東京大学を卒業し、東京大学大学院修士課程を修了する。研究室に環境系を選んだのは当時の教授の難波和彦さんの影響があったという。進路を迷っているとき「これからは環境ではないか?!」との一言をくれたのだ。卒業して日建設計に入社した谷口さんは、意匠設計者として7年間在籍。小学館ビルを担当し、環境シミュレーションを活用して数々の評価を受けた。2016年に退社して設計事務所を開設する。同時に東京大学特任助教となり、2022年には同大学大学院建築学研究科の特任准教授に就いて現在に至る。学生時代に現名誉教授の難波先生と多くの時間を共有したのではなかったが、東大建築学の大先輩と同じレールを歩いているのは誇らしくもあり、講演や書かれるものからの学びは欠かさない。

おおむね海外の大学では研究室の人数が多いので充実した研究ができるという。が、一研究室に一年最大でも学生5名ほどの東京大学ではなかなかそうもいかない。だから、谷口研究室と赤司研究室・宮田研究室が研究グループをつくって25人くらいの体制で研究活動を始めているという。シミュレーションやAI技術を使い、空間の環境分布を可視化して人の行動変容を促す開発に取り組む。

■建築家と環境エンジニアと

2016年に開設したのが「スタジオノラ」で、建築設計と環境エンジニアリング、そして編集・執筆にキャリアのある妻のスキルも活かした組織です。環境エンジニアリングではシミュレーションを用い



て環境解析を行い、アドバイザー業務をする。建築設計と環境エンジニアリングの双方のノウハウを生かして設計したのが下馬の住宅である。内容は「環境シミュレーションを活かした建築デザイン手法」(本誌2020年2月号掲載)に詳しい。

環境とは熱・風・光環境と、パッシブな切り口が主流だが「エンジニアの立ち位置はまだ認知度が低い」と編集長がいう。これまでは建築家が感覚で考えていた分野といってもいいから、環境設計でお金を取れるまでには至っていない。「認証制度による付加価値という視点でディベロッパに認知され始めたが、建築界や大学での認知度をもっと上げたい」と谷口さんはいう。大学院生の中には、データを取りそれを人にフィールドバックする研究を面白いと感じる学生も増え始めている。

谷口研究室の強みは研究者自身が建築家として実務のなかで実用化して、世の中に示していけることなのだ。シンプルに形状を決めて行くデザインに、環境のアカデミックな成果を融合させることができる。

縁側で日向ぼっこする猫のように、人が能動的に快適な空間を選択しながら行動する建物。オフィスも住宅も建築空間が最新のシミュレーションによって失敗なく実現していけよう。

現在、木造建築で2,500m²くらいの商業施設を実施設計中だ。構造家・山辺豊彦さんとの協働で進んでいる。ここでも研究の成果を成していつかは楽しんでほしい。

「二足の草鞋」の言葉を使って環境研究への想いを語る。研究と建築設計をやっていく決意のある谷口景一郎さんは、両輪を回していける頭脳と感性をもつ近未来人なのです。